

## ベルリン主要新聞興亡表 (1800~1945)

鈴木 将 史

1. 本表は、拙論「フォス新聞—ドイツ語圏初の教養新聞」(小樽商科大学『人文研究』第99・100輯, 2000)の付録として、1800年から1945年までにベルリンにおいて創刊された主要新聞の発行期間をグラフ化したものである。1800年以前に発行されていた新聞は2紙 („Königlich privilegierte Zeitung von Staats-und gelehrten Sachen“ [『フォス新聞』]と „Berlinische Nachrichten von Staats-und gelehrten Sachen“ [『シュペナー新聞』])のみ。また、1945年までにドイツのほとんどの新聞が廃刊したため、表はこの期間に設定した。
2. 各紙には、付与した番号に従って概説を施しているが、その際『フォス新聞』、『シュペナー新聞』及び „Berlinische Abendblätter“ については、上記論文で詳説しているため説明を割愛した。
3. 概説については、上記論文との兼ね合いから、教養面をやや重視した。
4. 紙名が異なっているが、直系の新聞には同一番号をふった。
5. 本表において各紙は概ね発行年代順に表記されているが、合併関係にあった新聞は例外的に併記した。

### 各紙概説

#### 1) „Preußische Korrespondenten in Berlin“ (1813—1814)

ロマン主義者たちによる反ナポレオン運動の高まりを受けて、B. G. ニーブーア (Niebuhr: 歴史家。後のプロシア枢密顧問官) が創刊した国民主義リベラル紙。フィヒテの思想が編集方針に色濃く認められる。シュライエルマッハーに続いてアヒム・フォン・アルニムが編集長を務めるが、使命を終えたとして翌年には廃刊された。

#### 2) „Allgemeine Preußische Staats-Zeitung“ (1819—1862)

プロシア首相 K. A. v. ハルデンベルク (Hardenberg) の肝いりで創刊。絶対主義王制の時代であって、市民に対するリベラリズムの啓蒙を図ったが、編集を官僚が主導したため、じきに反動色を強め市民の支持を失った。48年以降多数の民間新聞が誕生する中、検閲下にあり続けた本紙は存在意義を失い62年に廃刊。

#### 3) „Berliner Zeitungshalle“ (1846—1849)

1846年に創刊。三月革命までは政府の広報紙的存在だったが、革命後に方向を転換する。即ち、当時の新聞はカフェで主に読まれていたが、そこに集うインテリたちの政治・教養談議が原動力となり結成された「ドイツ民主主義中央委員会」 („Zentralausschuss der deutschen Demokratie“) の機関紙となる。自由な論壇を標榜し、マルクスなど急進的な左翼思想を紹介したが、一大有力紙にはなり得なかった。教養欄を F. フォンターネが担当していたことでも知られている。

4) „National-Zeitung“ (1848—1938)

三月革命の気運を反映して、政治家・高級官僚・文筆家ら12名により創刊。当初より国民リベラル主義を旗頭に、貴族階級との対決姿勢を鮮明にし、ドイツ進歩党 („Deutsche Fortschrittspartei“) に対して機関紙的役割を果たした。ベルリン・ジャーナリズムにおいては、政党と深く関わった最初期の新聞といえよう。他の新興紙と異なり、経営陣にはF.ドゥンカー (Duncker: ドイツ進歩党創設者) など、ベルリンの実力者が多数関わっていたため、経営的には安定していた。1849年には、ベルリン紙で初めての夕刊を発行。50年の段階では部数1万で『フォス新聞』を抜き、ベルリン最大の新聞に成長する。„Urwähler-Zeitung“ (7) と協調し、初期には激しく政府を攻撃したが、同紙が発行禁止になった後は穏健リベラル紙として定着。一貫してオーストリアを批判し、プロシア主導のドイツ統一 (小ドイツ主義) を訴え続ける。20世紀に入ると、国民リベラル主義勢力の衰退と共に部数も減少。1910年からはベルリン初の夕刊専門紙 „8-Uhr-Abendblatt“ として延命を図る (その際、„National-Zeitung“ の名称は副題となる)。この方向転換は、当座は成功を収めたが、同様の夕刊紙 „Nachtausgabe“ が22年に創刊されると経営はまたもや悪化し、29年のモッセ・新聞コンツェルンにより買収されるが38年に廃刊となる。



5) „Neue Preußische Zeitung“ („Kreuz-Zeitung“) (1848—1938)

三月革命以降、急速な民主リベラル勢力の拡大に危機感を抱いた保守系右翼の委員会 (ビスマルクも所属) が、「革命と民主主義への対抗紙」として創刊。以来、ビスマルクの間接的な支援もあり、保守派論陣の牙城となる。王制の正統性を熱烈にアピールし、特にフリードリヒ・ヴィルヘルム四世の反民主主義・反議会議政策に大きな影響を与えた。普墺戦争に反対したためビスマルクと軋轢を生じ、1870年以降は自由経済政策を押し進める宰相と敵対する。後にビスマルクに謝罪するも、政府とは距離を置く保守系紙であり続けた。第一次世界大戦以降も本紙は存続し、共和制を激しく攻撃し続けるが、信奉するべき「王 (König)」と「祖国 (Vaterland)」を失い、ジャーナリズムからは「前時代的な新聞」の烙印を押される。1932年からは発行を兵士組合が請け負うものの部数は伸び悩み (約6千部。しかし、本紙の部数はその影響力に比較してもともと少なく、全盛時でも1万部を越えることはなかった)、39年1月1日 („Berliner Tageblatt“ (15) と同日) 廃刊となった。



6) „Kladderadatsch“ (1848—1944)

本表には、基本的に日刊紙を掲載しているが、本紙は代表的な風刺紙とはいえ週刊紙であった。三月革命直後から、„Der Berliner Krakehler“, „Berliner Charivari“, „Berliner Großmaul“, „Der Blaue Montag“ など、ベルリンには政治風刺紙が数多く誕生したが、長期間発行され続けたのは本紙のみである。創刊当時からビスマルク時代にかけて全盛期を迎えたが、以降真の意味で政治的な影響力を持たず、一定の人気を保ち続けたため、珍しく1944年まで発行された。しかし現在、その風刺画は、ドイツ政治・風俗史研究にとり、貴重な資料となっている。

7) „Urwähler-Zeitung“ (1849—1953)

「三級選挙法」 („Dreiklassenwahlrecht“ : 納税額により有権者を3階級に分類したプロシア法。1918年まで施行された) に抗議して F. ドンカーと A. ベルンシュタイン (Bernstein) により創刊された。政治評論を毎日掲載した最初の新聞であり、„Kreuz-Zeitung“ と度々激しい論戦を展開した。1853年に発行禁止処分を受けると、ドンカーは本紙を一旦廃刊し „Volks-Zeitung. Organ für Jedermann aus dem Volk“ をリニューアルして創刊した。

7) „Berliner Volks-Zeitung“ (1853—1939)

„Urwähler-Zeitung“ を1849年に創刊していたドンカーが1853年に受けた新聞発行禁止処分を機に、紙名を上記に変更して創刊した。ベルンシュタインも編集に参画していたため、紙面は基本的に „Urwähler-Zeitung“ を踏襲した。客観的な世論形成を目指して社説に力を注ぎ、とりわけ1886年から90年まで編集に携わったフランツ・メーリンク (Franz Mehring) の尽力は、本紙を一流の左派リベラル論説紙に育て上げた。ある意味では、ベルリン三月革命の精神を最も忠実に保持し続けた新聞である。1904年にはモッセ社の傘下に入るも路線は変わらず、ワイマール共和国を強く支持した。第一次世界大戦後の編集部は、O. ヌシュケ (Nuschke) と C. v. オシエツキー (Ossietzky) によって支えられたが、ヌシュケはドイツ民主党 (DDP) や戦後の東独キリスト教民主同盟 (CDU) を創設し、ソ連占領地区 (東独) 副首相を務めた政治家として、オシエツキーは後にノーベル平和賞を受賞したジャーナリストとして、ベルリン新聞界における本紙の名声を高めている。ナチス政権となっても、本紙は政府に過度には迎合せず、1939年 „Berliner Morgenpost“ に吸収された。

8) „Berliner Morgenpost“ (1898—1945)

新聞コンツェルン・ウルシュタイン社第5の新聞。「新ベルリン地域新聞」をモットーに左翼民主主義的論陣を張る。ウルシュタイン社生え抜きの若い編集者たちにより (経済担当で、後に『フォス新聞』編集長となるゲオルク・ベルンハルト (Georg Bernhard) は、創刊当時23歳だった) 全分野に渡り「コラム風」の自由な紙面を形成し、瞬く間にウルシュタイン社の主力紙に成長する。ベルリン自然主義の代表的なメンバーであるコンラート・アルベルティ (Conrad Alberti) も文芸欄を担当。総合紙としてベルリン最大の部数を誇った (623,000部 : 1930) 1934年のウルシュタイン社の当局による強制的な買収後も、本紙は『フォス新聞』とは異なりその人気はナチスにより評価されていたため、穏健な大衆紙として10年以上生き残った。



9) „Berliner Lokal-Anzeiger“ (1883—1944)

ウルシュタイン、モッセに続く第3の新聞発行人としてベルリンに名乗りを上げたアウグスト・シェール (Augst Scherl) がウルシュタイン社の „Berliner Zeitung“ (20)、モッセ社の „Berliner Tageblatt“ (15) に対抗するべく創刊。当初は週刊であり、広告収入のみを頼りに20万部が無料配布された。その人気は連載小説に負う面が大きく、小説が半ばにさしかかると、3ヶ月40ペニヒの「宅配料」を設定した。結局宅配料は購読料として定着したが、有料となってもその料金は『フォス新聞』の半分以下に過ぎなかった。紙面は非常に斬新で、海外からの電信を駆使した報道、多彩な広告面、充実した読者欄など、様々な刷新を試みた。政治的には政府寄りで、プチブル・軍人・役人の読者が多い。ただ、露骨な言論は避け、表向きには非政治的編集態度を装った。部数は常に15万部を越え、人気新聞に数えられたが、安い購読料、更に社主シェール夫妻の放蕩癖がたたり、経営は好転しなかった。シェールは1900年代初頭、鉄道建設にも手を伸ばし負債にまみれ、1913年新聞経営から撤退。本紙は筆頭株主のドイツ出版協会が引き継ぐ。16年にはアルフレート・フーゲンベルク (Alfred Hugenberg) 率いる新聞コンツェルン傘下に入り、その後も依然30万近い発行部数を維持し続け、ワイマール憲法下の議会主義に反対する右派有力紙の地位を確立する。ナチス政権下では積極的に国家社会主義を支持し、1943年に死亡した編集長F.フッソク (Hussong) に対しては、ゲッベルスの意向により国葬が執り行われた。44年にはナチス系のアーマン (Amann)・コンツェルンに売却され、同年 „Berliner Morgenpost“ (8) に吸収廃刊となる。



10) „Berliner Allgemeine Zeitung“ (1906 (1886)—1943)

„Berliner Morgenpost“ の成功に刺激され、国民主義リベラル保守派が経営難にあった1886年創刊の新興紙 „Das Deutsche Blatt“ を1906年に買収、改名して創刊した。1909年にはウルシュタイン社に売却される。部数的にはあまり躍進しなかったが、短命となることもなく、ウルシュタイン社では „Morgenpost“ の姉妹紙と位置付けられる。 „Morgenpost“ を補完する意味で、地域

記事・生活記事に重点を置いた。22年に同社の„Berliner Abendpost“ (11) と合併しながらも紙名は残すが、43年に„Berliner Morgenpost“ に吸収され廃刊する。尚、同名の新聞が1856-1863に発行されていた記録があるものの、本紙に直接関係した新聞ではない。

#### 11) „Berliner Abendpost“ (1887-1922)

ウルシュタイン社第3の新聞。3ヶ月1マルクという安い購読料で、部数的には„Berliner Zeitung“ を凌ぐ。広告・別刷は„Berliner Zeitung“ と共有。内容的にも類似した記事が多かったものの、文体はより現代的で読み易く、政治に関しても一定の距離を置いた。1922年に„Berliner Allgemeine Zeitung“ と合併し、紙名も消滅した。

#### 12) „Berliner Börsen-Courier“ (1868-1934)

既に„Berliner Börsen-Zeitung“ (13) の週刊別刷として発行されていたが、保守主義に傾いた同紙に対抗するべくリベラル経済紙として独立創刊。中道派高級市民層の支持を受けたが、ブルジョアジー・自由経済支援の資本主義的な政治・経済面に対し、教養面は多分に左翼的な傾向を持ち合わせていた。もっとも、劇評でリヒャルト・ワーグナーを最初に取り上げた新聞としても知られている。特に、20世紀初頭に参画したヘルベルト・イエーリンク (Herbert Ihering) とアルフレート・ケル (Alfred Kerr) は、その対照的な劇評 (イエーリンク—客観分析的批評, ケル—印象批評) で、共に演劇評論界をリードした。後にはイエーリンクによりブレヒトが発見され、エミール・ピスカトーア (Emil Piscator) の革新的演出が評価されるなど、同紙は経済紙であるにも拘わらず、文化的功績が極めて高い。1933年に施行された「国家社会主義編集者法」のもとにナチスの弾圧を受け、34年には再び„Berliner Börsen-Zeitung“ に吸収された。

#### 13) „Berliner Börsen-Zeitung“ (1855-1944)

ベルリン初の経済総合紙として創刊。じきに政治面及び教養面も充実した総合紙に発展する。当初国民リベラル主義を支持、しかし以降は排他的保守主義の傾向を強め、大地主・軍人層に浸透する。ナチスに同紙は重用され、編集長 W. フンク (Funk) はナチス政権誕生と共に宣伝省次官、帝国出版局長、経済相、帝国銀行総裁などを歴任した。1930年代中盤以降はナチスへの傾倒を益々強め、34年ライバル紙„Berliner Börsen-Courier“ を吸収。38年にはアーマン社に売却され完全にナチスの経済系機関紙となった。44年に„Deutsche Allgemeine Zeitung“ と合併され、紙名は途絶える。

#### 14) „Deutsche Allgemeine Zeitung“ (1918 (1861)-1945)

母体紙となった„Norddeutsche Allgemeine Zeitung“ は、イギリスの有力紙„Time“ のドイツ版を目指して共和主義者 A. プラス (Braß) により創刊。大ドイツ主義に基づいた民主主義を奉じたが、プラス本人がビスマルクに取り込まれ、次第に政府寄りの色彩を強めていった。1918年に帝政が崩壊すると急進左派に11月9日編集部は占領され、発行予定の同紙は„Die Internationale“ と紙名を変更したのみで「創刊」された。しかし、印刷所が操業拒否をするなど付け焼刃的な路線変更は長続きせず、三日後には再び旧体制の„Deutsche Allgemeine Zeitung“ が創刊される。その後、企業家 H. シュティネス (Stinnes) に買収されたため、資産家寄りの保守的傾向を一層強め、紙面を„Time“ から大幅に転載し、保守系有力紙として『フォス新聞』としば

しば論争を展開する。ただ、ナチスの台頭には「古きプロシアの伝統を脅かす存在」として警鐘を鳴らした。そのため発行禁止を含めた弾圧を度々受け、33年にはついに国家社会主義支持に転向せざるを得なくなる。39年にはナチス系出版社の„Deutscher Verlag“に身売りされ、同年„Berliner Tageblatt“ (15)を併合するなど、ナチスの保護のもとに発行され続けるが、終戦と共にその歴史に幕を下ろす。本紙は外面的にはまさしくナチスの御用新聞であるが、„Völkischer Beobachter“ (23)など他のナチス系新聞と異なり、編集部内には常にファシズム政権に対する危機感が存在していた。「ナチス系新聞」の看板は本紙にとっていわば「世を忍ぶ仮の姿」だった訳である。従って本紙の編集部員の内、戦後のドイツジャーナリズムの復興に貢献した者も少なくない。



#### 15) „Berliner Tageblatt“ (1871—1939)

ライプチヒの新興紙„Die Telegraph“と、著名な家庭画報„Die Gartenlaube“の編集者を務め、後にベルリンを代表する新聞発行人となるルドルフ・モッセ (Rudolf Mosse)により創刊。当初より『フォス新聞』に対抗するべく発行された本格的な総合教養紙である。創刊後程なく編集部内に意見対立が起こり、左翼リベラル派編集者たちが離脱、独自に„Neues Berliner Tageblatt“を創刊する。一方本紙はその後、右翼リベラル紙として発展を続け、とりわけ世紀転換期における教養欄は、後年レッシング劇場を設立するオスカー・ブルーメンタール (Oskar Blumenthal)、人気作家パウル・リンダウ (Paul Lindau) 更にはフリッツ・マウトナー (Fritz Mauthner)の参画により、テオドール・フォンターネやオットー・ブラーム (Otto Brahm) やパウル・シュレンター (Paul Schlenther)を擁する『フォス新聞』と、劇評分野において勢力を二分した。1872年には風刺雑誌„Ulk“を創刊。78年には部数7万5千を数え、„Kölnische Zeitung“を凌ぎドイツ最大の新聞となる。1906年に編集長に就任したモッセの甥テオドーア・ヴォルフ (Theodor Wolff)のもと、本紙は更に飛躍を遂げ、国際的な有力紙に成長する。軍国主義に対する彼の民主共和主義的編集方針は読者を更に拡大し、本紙の部数は最大24万5千部(1916)に到達した。ヴォルフは当代一流の教養人でもあり、彼を中心としたベルリン・芸術サロンが形成された。そこから彼自らも発起人となるブラーム主宰の会員制演劇鑑賞会「自由劇場」 („Freie Bühne“)が結成され、ドイツ自然主義演劇を大きく推進することとなる。自身も作家の一面を持つヴォルフは、ドイツ文学に寄与した最大のジャーナリストのひとりといえよう。ナチス政権は、影響力の極めて強い本紙を、他紙にもまして統制下に置こうと画策し、親衛隊将校を編集長に送り込むなどして、本誌は30年代後半には完全に反ユダヤ主義ナチズム広報紙に変貌した。そのため部数は極端に落ち込み、最終的には39年にナチス系となった„Deutsche Allgemeine Zeitung“に併合され、新聞社もナチス系の„Deutscher Verlag“に吸収された。後期はともあれ、全盛期の本紙は『フォス新聞』、『フランクフルト新聞』と並び称されたドイツ有数の「クオリティー・ペーパー」である。



16) „Die Post“ (1866-1919)

企業家 B. H. シュトロウスベルク (Strousberg) が言論界への影響力獲得を狙い創刊した。本紙は従って当初からシュトロウスベルク・コンツェルンのプロパガンダ紙として発行されたが、彼の破産 (1872) により別会社に売却され、74 年からは保守系自由主義国会議員団の所有となった。ビスマルク政権を支持し次第に発言力を高めるが、1918 年の十一月革命時には右派反動勢力との連携を失い、翌年 „Der Tag“ に併合された。

17) „Der Tag“ (1900-1934)

ベルリン新聞発行人の「御三家」であるウルシュタイン、モッセ、シェールのうち、前二者はそれぞれ『フォス新聞』, „Berliner Tageblatt“ というドイツを代表する有力紙を発行していたのに比べ、シェールの新聞は専ら大衆向けであったため、彼も高級紙の創設を熱望していた。„Der Tag“ によってその夢は実行に移された訳である。初の二色刷りを採用した紙面は、ユーゲントシュティールの題字デザインと豊富なイラストにより従来の新聞イメージを視覚的に一新した。また、この新聞のユニークな点は、二種類の版を同時に発行したことである。題字を赤く染め抜いた版 („Roter Tag“) は、党派の別なく様々な政治的意見を広く掲載し、通常黒題字版 („Schwarzer Tag“) は、保守系国民主義的傾向を示した。教養欄ではケルが筆陣を張った。年を経るに従いドイツ国民主義的傾向を強めるが、経営的にはシェール・コンツェルンの文字通りの「お荷物」となった。1916 年シェール社がフーゲンベルク社に吸収されると本紙も同社から発行され、19 年には „Die Post“ を併合するものの、最終的にはナチス政府の圧力により廃刊した。尚、第二次世界大戦後に西ベルリンで発行された同名の新聞がある。



18) „Germania“ (1870—1938)

中央党 („Zentrumspartei“：ドイツ・カトリックを柱として、右派・左派共に内包する中道議会勢力。現在の CDU へと連なる)機関紙として創刊。紙面に関しては時の党内勢力により右派と左派の間を変遷した。ドイツ帝国建国の前年であるのは偶然に近いが、教会の権利拡大を最大の旗印としたため、ビスマルクと終始対立する。„Kölnischer Volkszeitung“ と並びドイツ・カトリック言論文化の中心を形成し、„Vorwärts“ (22) と度々論戦を展開した。ナチス台頭の折は、当初その強引な手法を批判したものの、ヒトラーが政権につくと、大株主であった中央党右派の F. v. パーペン (Papen：ヒトラー政権誕生時の副首相) の画策で政府に迎合し、最終的にはゲッペルス「画一化計画」 („Uniformierungsprogramm“) を受け廃刊した。



19) „Neues Berliner Tageblatt“ (1872—1879)

„Berliner Tageblatt“ が創刊された翌年、編集部が分裂、本紙が新たに創刊された。ウルシュタイン社が最初を買収した新聞である (1877 年)。売却後 „Deutsche Union“ と改名、国民リベラル主義が色濃く、自由通商政策を支持した。78 年にウルシュタイン社が自由主義的傾向のより強い „Berliner Zeitung“ を買収すると、翌年廃刊となる。

20) „Berliner Zeitung“ (1876—1943)

ジャーナリスト P. ラングマン (Langmann) により創刊。1878 年経営難によりウルシュタイン社に売却される (ウルシュタイン社第 2 の新聞)。徹底した自由主義を唱え、当局と激しく対立する。1884 年に „Berliner Volksblatt“ (22) が創刊されるまで、ベルリン唯一の社会民主党支持紙として独自性を発揮した。1904 年に „B. Z. am Mittag“ と改名して紙面を一新し、ドイツ紙として初めて街頭販売専門に発行される。午後版となると、当時の印刷技術から当日午前的事件は掲載が難しかったが、本紙は最新の技術のもとに即日掲載を可能とした。例えば 1913 年 10 月 17 日午前 11 時に起きたツェッペリン型飛行船の墜落事故は、その 1 時間後には本紙に掲載されるという現代並みの報道スピードを実現している。43 年ナチスの方針により廃刊。因みに、1945 年には東ベルリンで、„Tägliche Rundschau“ (21) とほぼ時期を同じくして、本紙と同名の新聞が、ソビエトの広報紙として発刊された。





21) „Tägliche Rundschau“ (1881—1933)

非政治的教養紙として創刊したが、後右翼系紙に転向。植民地政策に賛同する。世紀転換期の文芸欄はハルト(Hart)兄弟が参画し、自然主義的傾向を打ち出す。1922年に売却され、„Deutsche Allgemeine Zeitung“と合併、一旦廃刊に追い込まれたかに見えたが、その直後本紙の存続を図るH.リップラー(Rippler:ドイツ国民党議員)らが本紙を„Neue Tägliche Rundschau“と改名して28年まで発行する。その後元の紙名に戻り、既に時代遅れとなったりリベラリズムを批判し続け、国家主義と社会主義の融和を図るが果たせず、33年に発行禁止となり廃刊する。尚、第二次世界大戦直後に、ソビエトの広報紙として東ベルリンで真っ先に出された同名紙がある。

22) „Berliner Volksblatt“ (1884—1890)

ベルリン市議会の社会民主党義会派が中心となって創刊されたベルリン社会民主党(SPD)機関紙。市民リベラル紙程の先鋭的な論陣は張らなかつたが、ビスマルク政権を批判し続けた。1890年総選挙でのSPDの躍進と共に部数も2万5千部と拡大したが経営基盤は弱く、編集主任P.ジンガー(Singer:後のSPD党首)の私財や党から資金が提供された。教養欄としては、ブルーノ・ヴィレ(Bruno Wille:左派文芸評論家。後にSPDから脱退)が1890年に„Freie Bühne“に対抗した左派系演劇鑑賞会„Freie Volksbühne“設立への呼びかけを同紙上で行なったことが知られている。

22) „Vorwärts“ (1891—1933)

1890年総選挙でのSPD勝利を受けて、„Berliner Volksblatt“を全国紙用にリニューアルした党機関紙。紙面内容では、全国向けとベルリン地区向けの二本立て編集方針を採用したため、副題には旧紙の紙名を添えている。しかし、この地方紙並びに全国紙としての二重性格ゆえに、党機関紙としての特質を十分に打ち出すことはできなかった。編集部には、編集長W.リープクネヒト(Liebcknecht)やK.アイスナー(Eisner:バイエルン州初代首相。1919年に暗殺)を始めとして、後の代表的なSPD政治家が名を連ねる。„Vorwärts“編集部は、政治家の他に(マルクス主義者という前提のもとで)多数の知識人を生み出したことでも名高い。中でもベルリン民族博物館館長を務め、ドイツ民俗学の礎を築いたハインリッヒ・クーノウ(Heinrich Cunow)、社会学者ルドルフ・ヒルファディンク(Rudolf Hilferding)、“Freie Volksbühne”の支配人を20年間務めたコンラート・シュミット(Conrad Schmidt:Käthe Kollwitzの兄)などが特に著名である。1900年のリープクネヒトの死後、本紙編集部は集団指導体制となるが、部内で度々理念的な対立が起こり、同一紙内の別々の紙面で異なる社説が掲載される事態も発生した。とはいえ部数はSPDの発展と歩を同じくして増え続け、第一次世界大戦時には15万4千部を数えた。教養欄も充実を見せ、クルト・トゥホルスキーやヨーゼフ・ロートなども定期的に寄稿した。1928年からは夕刊が独立し、街頭販売用夕刊紙„Der Abend“が第二の党機関紙として発刊する。しかしナチスにとっては危険紙と見なされ、33年2月27日の国会議事堂炎上事件で即日発行禁止処分を受けるとそのまま廃刊した。



### 23) „Völkischer Beobachter“ (1920–1945)

その前身は、1887年ミュンヘンに創刊された弱小地方紙 „Münchner Beobachter“。第一次世界大戦後上記紙名に改名し、敗戦後のドイツ再興を鼓舞しながら「ユダヤ人の強制支配と偽社会主義」からの脱却を謳う。格好の広報紙として20年ナチスが買収。当初の経営は悪化していたが、マックス・アーマン (Max Amann) が社主となり、ワイマール体制に不満を持つ国民たちの支持を得て好転した。本紙は数あるナチス系新聞の中でも最も正統なものとして、ナチスの公式発表や集会・演説会日程を逐一掲載した。23年に起きたヒトラーのミュンヘン一揆により発行禁止となり、一時期経営難に陥ったが、『我が闘争』を出版することにより財政を立て直す。27年より全国販売を開始。32年にはベルリンにも編集部・印刷所を設置。41年からは、併合下のオーストリアでも販売された(ミュンヘン版のみ)。本紙はプロパガンダ紙の極致を提示した新聞としても興味深い。「我が祖国からの犯罪的搾取!」、「市場詐欺師どもによる隷属的束縛!」、「ドイツ国民への裏切り」等、戦闘的な大見出しを本紙は得意としたが、サイズも他の新聞よりひと回り以上大きく(42.5×52.5 cm。当時は『フォス新聞』や „Berliner Tageblatt“ など31×44 cmが普通)、赤インクも使用。イラストも豊富で、26年には最初の写真も掲載した。1面の印象はポスターと見まがう程強烈で、現在の大衆娯楽紙の形態を先取りしたものといえよう。また、段組も通常(7~9 cm)より狭め(6.75 cm)6段組みを導入(通常は3~4段組み)。速読に対応し、より読後インパクトを強めようとした結果である。だが、文字は41年までドイツ文字を使用した。ナチスが政権を獲得してからは飛躍的に部数を伸ばした(12万部)ため、経済欄、教養欄も拡充。部数は大戦中未曾有の170万部に達した。44年ベルリン本社印刷工場が被爆したため、発行中止の止むなきに至るが、45年4月末にその代替紙としてサイズを縮小した „Der Panzerbär“ が発行される。しかしこの新聞は、崩壊直前のベルリンで僅か1週間(4.23~4.29)しか発行されず、敗戦必至のドイツ戦況を、尚も自国優位と報道し続けた。これだけの欺瞞に満ちた新聞(らしき出版物)は他に例を見ない。その題字の右上にある「読後回覧」の文句が、同紙の性格をよく表すものである。



24) „Berliner Illustrierte Zeitung“ (1894—1945)

網版による写真印刷技術は1881年に開発されたが、コダックカメラの登場と相俟ってこの印刷技術が本格的に導入された最初のベルリン新聞が本紙である。もともとは1890年(1870年の説もあり)に創刊されていたが部数的に伸び悩み(1万3千部強)、94年ウルシュタイン社に4番目の新聞として買収された。レオポルト・ウルシュタインは紙面を一新し、速報性を重視しながら写真・イラストを存分に活用することにより、写真入り大衆紙の原形を作り上げた。新聞小説にも新境地を拓き、マックス・クレツァー、アルトゥール・シュニッツラー、ゲルハルト・ハウプトマン、ヤーコブ・ヴァッサーマン、リカルド・フーフらの執筆作のうち、後に映画化されたヒット作も少なくない。また、本紙により、「新聞イラストレーター」という職業分野も確立した。編集部の中心的人物であるクルト・コルフ(Kurt Korff)とクルト・スツァフラスキ(Kurt Szafraski)が、ナチス政権誕生と共にアメリカへ逃れ、当地で写真誌„Life“の創刊に携わったエピソードは有名である。本紙の部数はウルシュタイン社のもとで驚異的な伸びを見せ、1914年にはベルリン全紙中初めて100万部を越え、20年代終わりには、200万部を突破した。政治的色彩は極めて薄かったため、ナチス政権下でも当局寄りの写真紙として、敗戦まで発行が継続された。

25) „Die Rote Fahne“ (1918—1933)

急進左派社会民主主義結社「スパルタクス団」(„Spartakusbund“)機関紙として創刊される。その経緯は正にスパルタクス団の特徴を象徴するもので、1918年11月9日にスパルタクス団の団員たちが、当時ブルジョア紙の代表と目された„Berliner Lokal-Anzeiger“本社を襲撃占領し、同紙を„Die Rote Fahne“に紙名変更し即日発行した事件にさかのぼる。やはり同日、„Deutsche Allgemeine Zeitung“ (14)が急進左派ジャーナリストたちに占拠され„Die Internationale“が発刊されたことは既述したが、両事件とも、十一月革命を形成する一連の事件に数えられる。本紙の場合も、„Deutsche Allgemeine Zeitung“同様、編集部の占領状態は数日で終了し、本格的な創刊号は改めて同年発行し直された。引き続き翌年結党されたドイツ共産党(KPD)の中央機関紙となる。共産主義プロパガンダ紙として、新聞でありながら反ジャーナリズムを標榜し、紙面の過半はKPDの理論武装に充てられた。従って本紙は、到底一般受けする性質を有してはいなかった訳だが、それでも最終的に13万人程度の読者を得ることができたのは、優秀な執筆人に負う点が多い。カール・リープクネヒト、ローザ・ルクセンブルクを発行人とする本紙のもとには、ヨハネス・R・ベッヒャー(Johannes R. Becher: 東独を代表する表現主義作家。後の東独文化相)、エーリッヒ・ヴァイネルト(Erich Weinert: 作家。東独国家賞を後に受賞)、ゲオルク・ルカーチら、マルクス主義学識者が集結した。1920年代にはソビエトの例に倣い、「労働者通信員」として全国の労働者による報道執筆を提唱した。„Berliner Volks-Zeitung“とは異なりワイマール共和国にも賛意を示さず、時の政権と激しく対立。従ってまた、最も厳しい弾圧を受けた新聞である(創刊から廃刊まで、計約千日程発行禁止処分を受けている)。



参考文献

- Peter de Mendelssohn: Zeitungsstadt Berlin, 1959 Berlin.  
Jürgen Schutte/Perter Sprengel (Hrsg.): Die Berliner Moderne, 1987 Stuttgart.  
Gustav Dahms (Hrsg.): Das Literarische Berlin, o. J., Berlin.  
Heinz-Dieter Fischer (Hrsg.): Deutsche Zeitungen des 17. bis 20. Jahrhunderts, 1972 Pullach bei München.  
Ludwig Salomon: Geschichte des deutschen Zeitungswesens, 1906 Oldenburg/Leipzig.  
Wilmont Haacke: Handbuch des Feuilletons, Bd.1-3, 1951-53 Emsdetten.  
Arend Buchholtz: Die Vossische Zeitung, 1904 Berlin.  
W. Joachim Freyburg/Hans Wallenberg (Hrsg.): Hundertjahre Ullstein. Bd.1-4, 1977 Berlin.  
Ernst Consentius: Die Berliner Zeitung bis zur Regierung Friedrichs des Großen, 1904 Berlin.  
Werner Becker: „Demokratie des sozialen Rechts“. Die Politische Haltung der Frankfurter Zeitung, der Vossischen Zeitung und des Berliner Tageblatts 1918-1924 (Inaugural-Dissertation), 1965 München.  
Walter G. Oschilewski: Zeitungen in Berlin, 1975 Berlin.  
Fred Oberhauser/Nicole Henneberg: Literarischer Führer Berlin, 1998 Frankfurt a.m./Leipzig.  
Norbert Jaron/Renate Möhrmann/Hedwig Müller: Berlin - Theater der Jahrhundertwende, 1986 Tübingen.  
Hans Herzfeld (Hrsg.): Berlin und die Provinz Brandenburg im 19. und 20. Jahrhundert, 1968 Berlin.

ベルリン主要新聞興亡表(1800~1945)

